

報告・資料

カウンセラーが行う教師にたいするカウンセリング研修の手法についての中間報告 An Interim Report about the Method of Teachers' Counseling Training by Clinical Counselor

和田 百合子*

緒言

平成7年度より始まった文部省スクールカウンセラー活用調査研究委託において、臨床心理士、精神科医がスクールカウンセラーとして実験的に小・中・高に配置されたのを機に、全国的には養護教諭増員の試案、平成10年度9月からは、幅広く教育に係る市民が1学年、3クラス以上の中学校に配置される心の教室相談員事業が展開されている。岡山県では教育相談スタッフ巡回事業、津山市さわやか相談事業、岡山市、倉敷市の臨床心理士等の派遣事業が展開されている。公立学校に教師以外の職種が公費で参入するのは、画期的である。歴史的視点で見れば、教育現場に子どもたちの心理面のケアないし教育をするために、教師以外の他職種を受け入れるか、受け入れないかの分岐点にあると考える。様々な事業は、期限付きの暫定的なものであるが、学校単位、地域単位、全国単位の実験であるとみれば、非常に貴重な実験である。

平成8年津山市立東中学校が県北で初のスクールカウンセリング事業の委託校となった。筆者は、平成8年度より上記校に他の臨床心理士1名と共にスクールカウンセラーとして派遣されたことをきっかけに種々の教師にたいするカウンセリング研修の講師に呼ばれる機会を得た。本稿では、カウンセラーが教師に臨床心理学的な見方を伝え、血肉にさせていただくことは可能なのか、またそれはどのような形で行われると効果的かを将来検討する下地として、筆者が行った教師へ

のカウンセリング研修のヴァリエーションを現在の段階で報告する。学生にカウンセリングを教授することと教師にカウンセリングを教授することの若干の比較もふまえて概観してみたい。

カウンセリングをクライアントに行うこととカウンセリングを教授することは本質的に異なっており、種々の工夫が必要になる。研修は、教師のニーズ、研修に割ける時間、研修者の質（動機付けやそれまでのカウンセリング研修）に応じて、臨床心理学的な子どもの見方を、そのときその場でその教師の方に必要な分量だけ伝えてゆく作業であったと思う。C. R. ロジャーズの言う来談者中心療法（Person Centered Approach）の考え方（C. R. ロジャーズ 1966）、カウンセラーが職業的に持つ「了解的關係」は、この業務のベースになっている。先に指摘した、分岐点の時期に本稿をまとめられることをありがたく思う。カウンセラーの社会的認知の問題にも関わっているし、遡って、教職、福祉職などの資格を取って、深く浅くはあるにしても最終的に人の心理面と関わってゆく学生にカウンセリングの学習はどうあるべきか、示唆を与えてくれると考えるからである。

筆者が実施したカウンセリング研修ヴァリエーション

1. 事業の実際

- 1) 本学短大幼児教育学科福祉専修の2年生にカウンセリングを「臨床心理学」という授業で伝える

*学生相談室カウンセラー 臨床心理士

場合

- 2) 本学大学児童学科4年生に「児童臨床心理学」という授業で伝える場合
- 3) 本学大学児童学科3年生に「演習」という授業で伝える場合
- 4) スクールカウンセリング事業において
校内新聞や自己紹介を通じて
校内研修という形式で
 カウンセリングの基本
 会話法などの実践的なもの
 事例検討
 コンサルテーションという形式で
 対担任教師へ
 連携という形で
 対担任教師へ 対養護教諭へ
 ケース終了後の検討会という形式で
 その他 教育相談担当の教師が教育相談研
 修を行う際のレジュメへのアドバイス
- 5) 教師の自主編成の勉強会での事例検討
- 6) 保護者と教師の合同の会で多人数、オープンなグループで行う場合
- 7) 教師の自主編成の勉強会でニーズが具体的に限定されている場合
- 8) 管理職へのコンサルテーション
- 9) 管理職の自主編成の勉強会の場合
- 10) 津山市さわやか相談事業において
 校内研修
 グループのコンサルテーション
 個別のコンサルテーション

上記のうち太字斜体のものを取り上げて、概観したい。研修の内容、研修対象の教師の感想、研修法の効果の順で記述する。

2. 本学大学児童学科3年生に「演習」という授業で伝える場合（平成8年度）

この授業は教師の自由裁量で教材や内容を構成できるので、学生の希望の多いカウンセリングを取り上げた。前半期をかけて臨床心理学的な講義をしてゆく。時間的に余裕があるのもこの講義の特徴であった。将来、教職を希望する学生のニーズに応じて「学校で使えるカウンセリング」を意識した。テーマと資料は基

本的に教師が選択し、それを学生がレポートし後期8回分を演習する。以下は、そのときに使用した表題と内容である。

<学校で用いられたいカウンセリング>

- 「突っ張りの背景理解と共感的な指導」の台本
ロールプレイング（メンタルヘルス大系，1988）
- 「相手の話を聞けないためにトラブルの絶えない小学5年生のケース」ロールプレイで考える
- 「カウンセリングを身につけよう」ロジャーズのカウンセリング理論に学ぶ
- 「欲求不満に抵抗があった例」カウンセリングの中の沈黙の意味を考える（佐治，1966）
- 「クライアントの話の背景にあるもの」
ネガティブな感情の裏には、いったい何が？
- 「遊戯療法とはなにか」（東山，1982）
- 子どもにとっての遊びの意味を考える
- 「感情体験を受けとめること」
喪失的感情について考える（小此木，1979）
- 「人の心に共感すること」（日精研，1986）
- クライアントの準拠枠，同化と調節
- 「心理テストと絵」
- クライアントとのコミュニケーション
- 「ニューカウンセリング」
- 心と体の結びつきを知る
- 「積極的な聴き方」
- Active Listeningとは何か（日精研1986）
- 「感受性訓練」
- 貝の心を考える，石の心を考える（東山1986）

この授業では「背中合わせで座ると相手と自分の呼吸が感じられ生きてると涙する」「自分の握った人の手が温かく感じられ、逆に自分の手の冷たさが感じられた。思うに自分は、あまり他人のことを思う人間ではないなと思い、泣けそうになった。」（ニューカウンセリング）「他人を理解することは難しいと思いました。相手の気持ちを十分理解し、良い聴き手になるには練習し、相手の反応を見なければなりません」（積極的な聴き方）という感想がある。こういった感想をまとめると感受性訓練では、五感をとおして自分を知

る、他者の存在を意識する、自分の人格を自分が許容するということが起きている。ここではカウンセリングを学習するというだけでなく、各人の心の健康を維持したり促進する営みが起きているとも言えよう。ここで教師と学生の研修を比較すると、教師は学校という現場で実際的に何らかの効果のあるカウンセリング技術の習得に対してニーズをいう。学生の場合は、教師になれたときに使いたい、という言葉は聞かれるものの、カウンセリングを知ってみたいというニーズが大きい。教師にカウンセリングを教授するさいにも各人が心の健康を確認したり促進する営みが感じられるが、副次的である。

両者のロールプレイの会話内容を比較する。カウンセリングの会話法を学習するための会話を作成するよ

資料1

Tパターン学習用に学生が作ったSパターン
先輩「あなた、タイム全然のびてないのねえ」
後輩「フォームが悪いんでしょうか」
先輩「まじめにやっているの？」
後輩「毎日がんばっているんですけど・・・」
先輩「だったら、もう少しタイムがのびてもいいはずよね。適当にすればいいって思っているんじゃないの」
後輩「一生懸命やっています」
先輩「どうだか・・・。このタイムじゃそうは思えないわよ」
後輩「・・・」

資料2

Tパターン学習用に教師が作ったSパターン
授業に入りにくい生徒が登校した日、保健室での担任との会話
教師「どうしたん？」
教師「えらいん？」
生徒「うん。頭が痛いんじゃ。」
教師「がんばってきたんじゃけん。授業を受けようや。もう保健室に来て2時間目じゃろう。しっかり休んだんじゃけん、授業に出てみようや。」
生徒「・・・」(無言)
後は話ができない状態が続く。

うに講師が指示する。Sパターン、Tパターン、Dパターン^{注1}(東山, 1992)の学習を目的とする。学生は、部活動で先輩が先輩に努力を認められない場面(資料1)、教師(平成10年8月津山市西中学校さわやか相談事業での研修)は、心身症的な痛みを訴えて授業に入らない生徒と指導する教師の場面(資料2)をとらえている。

この研修の教師の感想を資料3に抜粋した。実際応用したいという意欲とどう応用するかの苦悩が感じら

資料3

・教師が「授業に入れ」という考えのもとに生徒に対応していくこと自体の是非が難しくなっている時代です。「授業に入れ」という立場に立たねばならない時には本当にSパターンのみにならざるを得ない自分があります。しかし、聞いてやれる時間と自分がある時には、授業に入れてもよかったがない、授業にはどうせ入らんじゃろうというあきらめかも、ゆっくりTパターンでやれる自分もあると自分では思います。「教師」である以上その両方の間で悩むんだらうなあ、と思いつつまた、生徒と磨きあいをしていと思っています。

・目的が「生徒の心理を理解する」ということなので9つの要点を考えに入れて作ることができますが、目的が違うと大変難しいと感じる。日常的に生徒と接するのは「教室へ生徒を入れる」ということが目的で、生徒に接するので、説教しない、命令しない、干渉しないということは、本当に難しいなと感じた。日頃、生徒の心に入れる会話をしていないと、いざという時、話にならないということがよくわかった。

・教師として生徒と接している場合はいつも時間が気になります。授業のことや学校の時間で動かないような自由な時間(ゆとり)が欲しいと思います。長い時間をかけて、気になる生徒とのコミュニケーションをはかっていきたい。

・研修の中でいろいろ現実には厳しいということを感じたけど、教師側にはその立場上限界があるという点を講師の先生が理解してくださっていて、ホッとしました。それだけでこのスクールカウンセリングに対するイメージがやわらかいものになった。

れる。このように会話法の研修は、たたき台になる会話を研修者に作ってもらいとそれぞれの興味に従って生き生きしたものになるのではないだろうか。

自分の価値観を一時棚上げにして、クライアントの話に心を傾けて聴くという来談者中心療法の技術を体験するのだが、学生は技術の習得よりも日常会話との違いに気づいたり、心情的に共感している。教師は、時間的にもニーズからしてもカウンセリングを味わうのは、二の次で、かなり逼迫し、実際的に利用できるもの、教師のストレス軽減への対応を求めていると感じる。これは、とりもなおさず、教師が直面している生徒、児童の心理的状況がかなり逼迫し、実際的な課題解決が教師に重く課せられていることを示しているのかもしれない。

3. スクールカウンセリング事業において

校内新聞を通じて 教師にカウンセリングを伝える機会は時間的にも場所的にも制約されており、狭義の研修の機会だけでなく、校内新聞や生徒集会でコミュニケーションを取る機会が許された場合は、対教師へのメッセージも織り込んで伝えてゆけたらと思う。記事は、校内新聞の抜粋である。

カウンセリングとはどのようなものをするのか、教師に少しずつ理解していただけたらと思う。現在の教育



写真1

津山市立東中学校のカウンセリングルームと矢野校長先生。教室とはひと味違う部屋を目指し、カウンセラーの意見を取り入れてもらった。現在は教師が運営している。この後、多くの学校に同様の部屋ができた。校長は元鶴山塾塾長。この事業の推進には欠かせない人物である。

近頃思うこと

スクールカウンセラー 和田 百合子

本校に学部からスクールのカウンセラーが派遣され出して、一年になろうとしています。多くの方のご協力を戴き、学校でカウンセラーがどんなお役にたてるのか、たてなにかを日々の活動を通して探求する事業です。生徒さん、保護者の友、先生方、多数ご利用いただいています。この場を借りまして、活動の一部を皆様にご紹介できたらと思います。秘密保持のため、実際の活動を元に脚色してあります。)

生徒さん、保護者の友、先生方、多数ご利用いただいています。この場を借りまして、活動の一部を皆様にご紹介できたらと思います。秘密保持のため、実際の活動を元に脚色してあります。)

生徒が同じ日に親しい先

生に反発するの現実です。これは、教師とカウンセラーを使い分けてみるのではありません。純粋です。一人の生徒一人の大人の中に様々な行動の可能性がある。何かの人の本当の姿なのだろうか。こころいつた人の心の問題を、目に見えないものを問うていたので、解き方も答え方も、算数の問題とは違いますが、当事者は、あれやこれやと思いが、ふしぎに同じに、必死に聴く、信じてみる、



中庭のアジサイ

課程を受けた教師は心理学的理解を学んでいないので、言っても無駄だというカウンセラーや精神科医の意見があるのに甚だ残念に思う。教師、カウンセラーとも各々専門性があるのであるから、他の職種の内容について正しく理解していないのは当然であろう。それぞれの職種の専門性に敬意を払い、筆者は一定の枠組みのなかで許される限り適切で効率の良い方法で教師にカウンセリングを伝えるのが大切と思う。

校内研修という形式で 平成9年度の岡山県のスクールカウンセラーの業務内容（岡山県教育相談推進会議まとめ、1998）を見ても研修会、講演会の講師を業務の一部としている。「思春期の心理と指導のあり方」「子供の問題のあり方」「カウンセリングとは」など「思春期」「カウンセリング」のキーワードを臨床心理学的に解説するものと「箱庭療法」「遊戯療法」「会話法」など講師を勤めるカウンセラーの得意な分野から技法を伝えるもの、その他不登校児の親の会のファシリテーターの役割に大別できる。いずれにせよ、校内

研修は特殊ではないが方法やその効果の検討は不十分である。教師のニーズに十分応えずカウンセラー側が教師にはこういう臨床心理的な見方が必要だと構成した研修は双方に苦痛となって効果が少ない。筆者は研修を頼まれたときは、「何を学ばれたいか」だけでなく、「何故学ばれたいか」「どういった立場の先生からその要望が出されているか」など、先生方は驚かれるがお尋ねすることにしている。案外この事前ミーティングを行うだけでも、その教師集団が困っている課題が明確に見えるし、教師の方で「本当に研修すべきは別のことですね」と気づかれることも多い。PCA理論、面接の技法の中の「明確化」を応用できる。研修は教師のニーズに応じるのは最も重要だがスクールカウンセラー事業のように1年半近く期間があるものは、研修全体の流れをカウンセラー側がイメージする事も重要と思う。筆者は、先に平成8、9年度の津山東中学校でのスクールカウンセラーとしての活動を「臨床心理士としての専門性」と「臨床心理士が職業的に持つ了解的関係」のキーワードを用いて導入期、展開期、終結期とまとめた。(岡山臨床心理研究会平成10年6月定例会)結果的に校内研修の内容は変化している。筆者が担当した研修のポイントを概観する。

導入期の研修は、カウンセラーやカウンセリング、コンサルテーションの説明とともに、教師との摩擦を軽減できるように、カウンセラーが学校で仕事をするときの領域を説明し、教師の言語化されない自分の領域を侵害されるのではないかと懸念に配慮している。

展開期の研修では、スクールカウンセラーの仕事を具体的に知りたいという要望に応じて、筆者が中心に関わった事例を取り上げた。事例検討のポイントを振り返る。

- a 多くの教師がその子の問題を具体的に知っている事例を取り上げた。
- b 担任からの紹介で事例検討を始めた。(カウンセラーと教師の連携は必須である)
- c 養護教諭のかかわりの実際も加えた。(養護教諭との連携は不可欠である)

- d カウンセリング場面のカウンセラーの応答を提示した。(教師が実際の会話に触れることは希な貴重な体験である。)
- e 上記の土台の上に「専門機関への紹介が適切なケースとはどのようなケースか」「回復の目安は必ずしも周囲から見て良い子になることではない」ことなど、講義形式では教師に伝達することが困難な臨床心理学的な子どもの見方を身近に感じてもらえた。

終結期の研修は、スクールカウンセリング業務の引継に関する事だった。教師と2人のカウンセラーの継続的な会合「教育相談推進委員会」に担当の教諭が提出した資料(東中学校1997度各教育分担の反省)から抜粋する。「(成果)具体的な教育相談での言葉かけなど知ることができ、生徒への対応に変化が表れ、暖かい関係作りができた。担当による相談活動も少しではあるができた。カウンセラーの先生方のアドバイスなどが教育相談の方向性を考えるのにとっても役に立った。」全体からカウンセリングのhow toだけでなく、子どもの言動を理解する上で臨床心理学的な見方が教師とカウンセラーの間で共有されたことを感じとっていただけるだろうか。

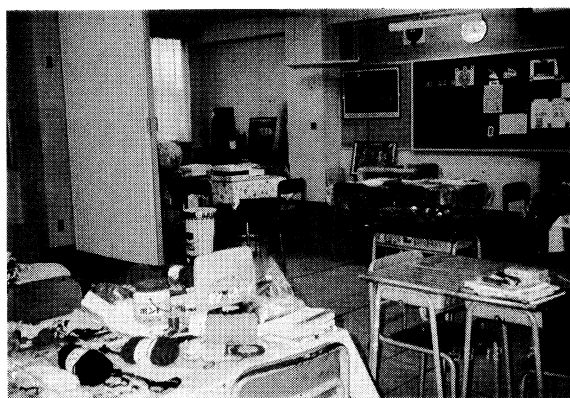


写真2

津山市立東中学校の「さくらルーム」
 スクールカウンセラー事業が引き継がれた。
 学校に行きにくい子どもたちの教育の場を保証している。
 様々な課題が島のようにならびて点状に存在している。

4. 教師の自主編成の勉強会でニーズが具体的で限定されている場合

英田郡教育相談自主編成講座で行ったものを取り上げる。平成10年11月。依頼は、心理検査を勉強したいというものだった。筆者は以前より教育現場で心理検査を使用する際の安易さに危惧を抱いていたので、力不足ながら講師をお引き受けした。全訂版田中ビネー知能検査（田中教育研究所）を素材に、体験と教師主体のディスカッションで構成した。心理検査者を訓練するための課題（松原達哉，1995）を参考に教師に必要と思う課題を加えた。具体的には、測定誤差の問題（レポート、検査状況、検査者の習熟度、被験者の問題理解度、ハローエフェクトなど）、知能検査の功罪、被験者の権利の問題を選定した。研修の目的と研修時間によって、課題を加減した。「1つのテストでも、方法、採点の観点、児童の状態等で結果が違うことを身を持って体験できたのがとても良かった」「検査者、被験者色々な立場で経験し、感じとれた」「（検査をして）自閉症という診断がでて、それが正しくても自閉症だから駄目だと教育的働きかけをしないなら診断することが一人一人の子どもを教育することにマイナスになると思う。…知能テストはやはり必要と思うが、やりっぱなしは駄目で講師が言うように『検査は子どものためにする』を常に頭に入れておくことが大切と思った。」等の感想を戴いた。体験とディスカッションの話題選定が重要と思う。心理検査の学習を通して、臨床心理学的な見方を伝えられると思う。

5. 津山市さわやか相談事業において

津山市は元々鶴山塾（教育相談施設）、ポポロ津山（適応指導教室）など教育相談活動に関心が高いが、平成8、9年度の東中学校の文部省スクールカウンセラー活用調査研究委託で臨床心理士の業務を身近に具体的に見ていただくことができた。筆者はスーパーヴァイザーとして、1月に1回津山市西中学校関係の仕事をさせていただいている。1回2時間であるので、研修会の講師や教師との個別のコンサルテーションを中心にしている。個別のコンサルテーションを概観する。

個別のコンサルテーション 行政に雇いあげられたたカウンセラーとして、時間、場所、内容ともに一人、ないし数人の教師のニーズに応じてコンサルテーションを行う。コンサルテーションの「出前」である。筆者の時間的制約から生じた苦肉の策で、筆者にとっても初めての試みであったが、教師に短時間で深く臨床心理学的な見方を体験してもらえらる可能性があると感じる。事例をあげる。守秘義務の関連上たとえていうならば、教師が生徒のチック（神経症的習癖の1つ）を憂慮してあれこれの手だてを講じているケースに、コンサルテーションを行うとする。あれこれの手だてが効を奏するには、当該の生徒のニードを生徒側の視点で見いだすことが重要と思う。しかし教師と生徒の間には学業の評価や部活動での人間関係や進路面で情報を持つ側と持たない側のような依存関係など様々な要素が入り込んでいる。そのために、教師側の視点と生徒側の視点は入り混じりやすい。コンサルテーションを行う中で教師の視点を明らかにしていく（明確化する）ことは、有効であった。具体的には、カウンセラーの研修の際のスーパーヴァイザーとスーパーヴァイザーの関係をコンサルテーションを受ける教師とカウンセラーの間で作り、「チックがあるとなぜ心配になるのか？」「チックが続くとどんな結果があるイメージしてしまうか？」など話し合う。教師は「…については彼は悩んでいるはずだと言う思いこみがあったかもしれない、生徒が何をどう困っているのかまた聞いてみよう」という内容の感想を述べている。このように教師と生徒の間に混沌として入っている教師自身の視点のニードと生徒自身の視点のニードを描き分けられることがある。

6. 教師の自主編成の勉強会で事例検討をする場合

平成10年8月実施。事例発表を含め2時間
津山市教育相談「分科会」（自主編成講座）を取り上げる。1、主催者側と講師が事前に協議をし、主催者側（教師）が研修を受ける教師のニードを把握するためのアンケートを実施することを合意した。2、講師の側で事例提供をされる教師からケースの概要を聞

き、そのケースを通して教師集団がカウンセリング研修を行えるよう適切なレジユメの形式等を提示した。

レジユメの要点は、1) サブタイトルをつけること。サブタイトルをつけることによって、事例（この場合は生徒）を外的な特徴で捉えるだけでなく、様々な視点から捉えることができる。このケースの場合は、教師と生徒の心理的な人間関係の中で生徒の対人関係上の特徴を捉えることができた。2) 紙面を縦に分割し、右の枠に対応したときの気持ちを教師に書いてもらう。教師としての喜びや不安や迷いを表出すること、それを自分自身、講師、教師集団から受容されることによって、案外、事例提供をする教師が事例を臨床心理学的に素直に見直すことが起きるのではないだろうか。3) この2点のレジユメの形式は全員が事例の深い心理面に触れやすいような下準備となる。

フロアーからは、「私もいろいろ困るのですがM先生もご苦労されているんだなあ、感動しました。」という感想やM先生からは「はくがA君に感じる課題とAにとっての課題は違うのかもしれない」という感想が語られた。生徒へのかかわりや生徒の理解が教師の内面からまた生徒の内面からされている。素朴な発言の中に臨床心理学的な理解の端緒を拝見する思いである。

伝えるべき臨床心理学的な見方

研修は、生徒や教師との出会い、試行錯誤の中から生みだしたもので、もとより理論的に構成されたものではなかった。これまでに実施したカウンセリング研修のヴァリエーションを概観して、教師方に伝えるべき臨床心理学的な見方とはなにか考えてみたい。

- 1) 子どもの心理面を理解する際に子どもの内側の視点から見る。
- 2) 子どもを内側から見るとはどういうことか体験する。カウンセリング研修の中からその技法のヒントを得る
- 3) カウンセリング技法は子どもが情緒的に混乱しており、その不安を軽減したり、子どもの内側からの心理学的な理解が必要な場面に有効であり、教師がその

時注げる心的エネルギーを考慮して適用されるべきものと思う。子どもを理解しなければならぬと言うのは、外側の人間の幻想であって、案外子どもは、あるとき、ある人にある一定の心の領域だけ理解されることを望んでいる。カウンセリング技法で頻繁に教授される「受容」を場面を限定せずに用いると、子どもは、心理的な葛藤を「受容」されたと受け取らず、心理的な葛藤から起きる逸脱行動を教師から「許容」されたと受け取ることも起きる。この場合、教師と子ども双方に混乱が起きるのは必至である。筆者の言う、「教師がその時注げる心的エネルギー」に関して、「自分に余裕があるとき技法を使ってみよう」「教師に限界があると伝えてもらえただけで心の重荷がとれた」という教師の感想は、この点を指摘する大切さを示唆している。

4) 心の成長は、一直線に向上してゆくものでなく、時には「停滞」「閉じこもり」や「反抗」「悪」を経由することがあるらしいこと。

5) 心の世界は、 $1+1=2$ ではないこともあること。子どもの情緒的な混乱や症状、習癖、「問題行動」を異常と切り捨てせず、そこに成長や精神的な健康を回復する可能性が含まれていると体験すること

残された課題

教師にたいする研修の効果を判定する基準はどうあるべきかの検討が残されている。また、そういった研修を作り上げ、教師と共同作業を行うことがカウンセラーのカウンセラーとしての資質の向上や維持にどのような影響を与えるかという検討も必要と思う。

総括

学生にカウンセリングを教授する場合と教師にカウンセリングを教授する場合の若干の比較と合わせ、筆者が教師にたいしてカウンセリング研修を実施した際のヴァリエーションを教師の感想を交えて報告した。カウンセラーが教師に臨床心理学的な見方を伝え、血肉にさせていただくことは可能なのか、またそれはどのような形で行われると効果的かを将来検討する手がか

りを得た。カウンセリングの技法を伝える以上に「臨床心理学的な子どもの見方」を伝えることの重要性を感じた。筆者が教師のカウンセリング研修に必要であったと思った「臨床心理学的な子どもの見方」を具体的に整理した。拙文に皆様からご批判ご意見をいただきながら、残された課題に精進できればと願っています。

拙文をまとめる機会をくださった編集委員の皆様、小山京子先生、スクールカウンセリングでのパートナーである高見病院の木浪富美子先生、ともに研修の場を支え合ってくださいました多くの教職員の方がたに心より御礼申し上げます。

平成10年12月1日

参考文献

- 岡山県学校支援事業連絡会議「平成10年度第1回学校支援事業連絡会議資料」1997
- 小此木啓吾「対象喪失」中公新書，1979
- 佐治守男「カウンセリング入門」国土社，1966，p75-92
- 田中教育研究所編「田中ビネー知能検査法1987全訂版」田研出版，1987
- 日精研心理臨床センター
「独習 入門カウンセリングワークブック」1986，p88-96，64-70
- 東山紘久「遊戯療法の世界」創元社，1982
- 東山紘久「カウンセラーへの道」創元社，1986，p74-78
- 東山紘久「子育て 母親ノート法のすすめ」創元社，1992，p112-162
- 松原達哉「最新心理テスト法入門」日本文化科学社，1995，p41-55
- 阿部正和ら監修「メンタルヘルス実践大系」日本図書センター，1988
- 山中康裕「少年期の心」中公新書，1978
- 友田伊東他編訳「ロジャーズ全集」全18巻，1966
- 和田百合子「学校臨床心理士の活動—文部省スクールカウンセラー活用調査研究委託事業に派遣されて—」の資料 岡山臨床心理研究会 1998年6月定例会

注1) Sパターン：標準的な会話パターン。Tパターン：治

療的な会話パターン。Dパターン：Tに似せたSパターン。S→Tにするための要点は、議論しない、子どもの意見と方向性に合わせる、説教しない、命令しない、干渉しない、操作を使わない、皮肉、いやみ、愚痴を言わない、代弁しないこととされる。

(1998年12月1日 受理)